

「没後100年 富岡鉄斎」展によせて

富岡鉄斎「撥墨山水図」(清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵)

—牧谿学習の一樣—

富岡鉄斎は、生涯中国を訪れることはなかったものの、膨大な漢籍の精読と書画作品の実見・模写による中国の歴史文化への深い理解のもと、様々な書画を生み出しました。本稿では鉄斎の中国画学習を窺わせる例として、清荒神清澄寺鉄斎美術館が所蔵する「撥墨山水図」(図1。大正9年[1920])をご紹介します。

本図は、画面上部の款記「瀟湘夜雨。仿牧谿和尚墨瀟。鉄斎。八十又五叟」「鉄斎」(朱文長方印)から、宋末元初の画僧・牧谿(13世紀)の画風に倣うこと、中国の名勝である瀟水と湘水一帯の風光を描く、伝統的な画題「瀟湘八景」の一つ「瀟湘夜雨」を描いたとわかります。扇面のフォーマットに、墨の諧調と乾潤を活かしつつ、奔放な筆遣いで、雨に煙る漁村と山々、水上に浮かぶ漁師の舟などを表します。

本図の制作背景については、表装の鉄斎自題と、鉄斎が知人の篆刻家・園田湖城に宛てた書簡から窺えます。自題では、知人の羅振玉(1866~1940。清末民初の知識人。辛亥革命を逃れて明治44年[1911]から八年間、日本の京都に亡命)が、帰国(大正8年[1919])後、手紙と共に自作の印章「願書万本誦万遍」(朱文方印)を送ってくれた喜びを語っています。本図を描く一ヶ月前にも、鉄斎は牧谿に倣う「漁村暮雨図」(「表紙のことば」参照。清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵)を羅振玉のために制作していることから、「撥墨山水図」も羅への思いのもとに生まれたと推察されます。書簡

は、本図を湖城に贈った際の送り状で、「此扇面仿牧谿筆法者。雖筆法拙劣非杜撰。(この扇面画は牧谿の筆法に倣うものだ。筆法は拙劣だが、いい加減に描いてはいない)」という鉄斎の自負等が語られます。

鉄斎は書簡の中で、本図を描くうえで、江戸の古美術図録『集古十種』(寛政12年[1800]序)に録される牧谿瀟湘八景図を参考にしたと語っています。これは正確には、室町の画僧・雪村周継による模本を版画にしたものです。本図と『集古十種』の牧谿「瀟湘夜雨」版画(図2)を比較すると、水上の舟や漁村、汀などの構成モチーフは近似しますが、山容表現は「煙寺晚鐘」(図3)など、その他の八景図のモチーフを適宜組み合わせているとみられます。これらの八景図版画は、濃墨と淡墨の二色摺で、実際の水墨画における墨調の変化を表そうとしています。「撥墨山水図」は、きわめて繊細な墨の変化で画中の大气や光を表す牧谿山水(図4。牧谿「遠浦帰帆図」重要文化財、京都国立博物館蔵)に比べると、墨調にメリハリがあり、まるで画面を削るような、闊達な筆遣いも際立っています。これは80代の鉄斎画に顕著な特徴ともいえますが、参考にした版画の表現技法を、肉筆画に翻案しようとしたためともとれます。

鉄斎は、50代の頃に牧谿ごさかじよす「五祖荷鋤図」(鉄斎粉本は清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵。原本は所在不明)を模写、明治35年(1902)までに「大徳寺の什宝なる観世音像」(牧谿「観音猿鶴図」[国宝、大徳寺

蔵)のうち「観音図」か)を実見するなどして(「僧牧谿の事」[『南宗画志』四号、1902年])、牧谿の画風を真摯に学び、「魚藻図」(大正3年[1914]、大和文華館蔵)等、少なからずの倣牧谿画を描きました。鉄斎が、牧谿筆「瀟湘八景図」を実見できたかは不詳ですが、版画を資に制作された「撥墨山水図」は、鉄斎が様々な媒体を元に、牧谿の筆遣いや構図等を学び、自身の画風に取り込もうとしていたことを窺わせます。

ところで先述の「漁村暮雨図」など羅振玉に関わる作品が、いずれも牧谿に倣うものだったのはなぜでしょうか。牧谿は、優品の多くが日本に伝来しているだけでなく、日中で評価が大きく異なり、日本では格別の珍重を受けた一方、中国での評価は低い画家でした。中国での低評価の背景として、その画風を酷評する画伝(元・夏文彦撰「図繪宝鑑」など)が後世に流布したこと等があげられますが、実際には好意的かつ客観的な立場から牧谿を記す、元の呉太素撰「松斎梅譜」のような画伝書もありました。本書は20世紀の中国では既に稀観

本でしたが、日本には数種の写本が伝存し、鉄斎はその一冊を所蔵していたのです(現在は大東急記念文庫蔵)。鉄斎は前述の園田湖城宛て書簡に「松斎梅譜」の牧谿伝を抜き書きし、「此梅譜不伝於志那、但存我家而已(この本はもう中国になく、我が家に蔵書するものだけだ)」と記しており、非常に誇りにしていたことが窺えます。

羅振玉は日本では、富岡家蔵の「松斎梅譜」を閲覧したり、鉄斎や京都の友人達と、日中の牧谿評の違いを話題にすることもあったのではないかと考えられます。「撥墨山水図」は、牧谿を通じた両者の学術交流の思い出、また絵画のみならず文字史料も通じた、鉄斎の積年の牧谿学習の集大成として制作されたのではないのでしょうか。(都甲さやか)

※図2・3は『集古十種』上巻(芸艸堂、1915年)、図4は「牧谿-憧憬の水墨画」展図録(五島美術館、1996年)より転載しました。

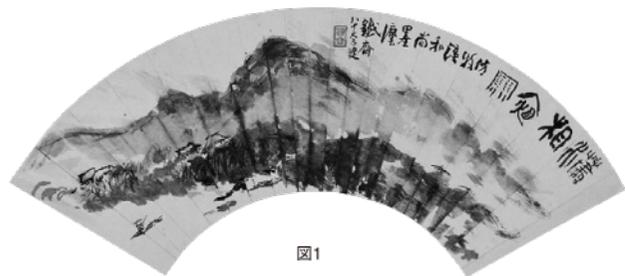


図1



図2



図3



図4